随想

棕櫚の木の追憶

武田　剛
（会員　佐伯市木立）

裏庭の小さな手掘りの池の側に、いつの間にか高さ一メートル程の棕櫚の木がはえている。植えた覚えがないので、鳥が落とした種が育ったのであろうか。その直線的な棕櫚の葉を眺めていると思い出す事がある。

我が家の隣の吉田家の先々代の佐四郎爺さんは、堂々たる体格でいつもニコニコしていた。トラクターなど機械のまったくない時代に、鋤・鍬で一町歩を越える田畑を耕し、冬は元越山の中腹で炭を焼き、その山にモッコクや山桃の良い株があると掘り取って畑で植木に仕立て根を薦で巻いては車力に積んで、佐伯の町を売り歩いた。佐伯の町の山際や船頭町界隈の古い植木は、爺さんの植えたのが多いそうだ。植木が売れると爺さんは、途中の酒屋で一杯やってごきげんで、空車を引いて帰った。

ある日から、突然爺さんは棕櫚の皮を買い集め出した。木立平野には、至る所に棕櫚の木が、まるで南洋の椰子の木の様にそこここに立って、一つの風情をかもしていた。爺さんは例のカラカラ軽い音を立てる車力を引いて剥いだ皮を買ったり、高い木には自分で梯子をかけて剥ぎ取って、車一杯になると佐伯の駅に運んだ。いいお金になるらしく毎日ホクホク顔だった。棕櫚は珍しい木で伸ぶにつれて中からどんどん茶色の丈夫な髪の毛の様な皮を作り出す。木立の棕櫚の木は、みな身ぐるみ剥がれ白い裸身を寒風にさらした。爺さんは、ただ皮を剥ぐだけでなく、大きな房につく小さな粒を取って畑に蒔き、苗を育て、みんなに「三十本も植えたら食うに困らん」と植え付けをすすめた。植える人が多く、私も百本貰って畑の廻りに植えた。大きくなったらハワイの椰子の並木の様になるだろうと楽しみにしていたら、一枚も葉がないうちに爺さんはばったり棕櫚買いをやめた。「どうしたんか注文が無うなった」と云って、大きな体をションボリさせて元気がなかった。棕櫚の皮の繊維は強くてくさらず、井戸のつるべの縄や牛の鞍の引き網や棕櫚の皮の雨合羽に使われたが、そんなに需要は無い。

棕櫚はどんどん伸びて育ったが、爺さんが買い付けをやめると皮を剥ぐ人も無く、無用の長物になり戦後ナイロンロープなどが発明されると、たちまちのうちに伐り倒されて、今その姿はほとんど見かけない。時々、金魚やメダカを飼う人が「産卵に棕櫚の皮が良い。」と云って探しにくるがもう無い。その棕櫚が突然降って湧いた様に、わが庭に出現したのだ。小さい時はただの雑草と思っていたが立派な棕櫚に育った。私は、その一メートル程の高さの棕櫚の皮をしげしげと眺めた。家内は「上に梅の枝があるから、どこかに移したら」といらんことを云う。眺めて隣の爺さんなどの追憶に浸るには一番良い場所なのに移してたまるか。家内の顔も見飽きた。

ある日、書店に立ち読みに出かけ、棚を眺めて廻っていると小さな文庫本で「戦艦武蔵　吉村昭著」と云うのがあった。私は小学校六年の秋、佐伯湾の沖合に停泊する巨艦を見た。恐ろしい感じがした記憶がある。戦後調べたら「戦艦大和」だった。「大和の姉妹艦の武蔵の事も知りたいな」と思って本を手にした。読み始めたら驚いた。なんとノッケから棕櫚の皮の事が出ているのだ。

以下、本の内容を引用しながら私の感想を書きます。

日中戦争が始まった昭和十二年頃、九州の水産界で大騒ぎが起きた。有明海沿岸の海苔養殖に使う網の材料の棕櫚が何者かによって買い占められ、海苔養殖が出来なくなったのだ。この正体不明の者は、九州はおろか四国から紀伊半島の棕櫚を買い占めたと云う。漁連が血なまこになって調べた処、買い占められた棕櫚は長崎の造船所に運ばれ、ロープに加工された事が分かったが何に使うかはわからなかった。そのロープは五百トンにもなったという。その長崎の造船所にも異常な空気が張りつめていた。船台も工場も大拡張されたのだ。造船所の内部では極秘で巨艦建造の計画が進行していた。すでに呉では一号艦（後の大和）の建造が具体化、二号艦（後の武蔵）が長崎で建造される事になった。一、二号艦も同型で巨大だった。陸奥、長門クラスの二倍の七万トンで、長さが二百六十三メートル、幅四十メートル、高さ五十メートル、直径四十六センチの砲弾を撃ち出す大砲の砲身の長さ二十一メートルの巨大さである。呉では地中を掘ってドックを造って建造するので、秘密は守り安かったが長崎の造船所は擂鉢状の港内にあるので、どこから見てもはっきり目につく。その巨大艦を人目にさらさず、秘密裡に建造

するのは不可能に近かった。しかし、日本を取り巻く国際情勢から見て、絶対秘密にしなければならなかった。この巨大艦をスパイや市民の目から隠すため、船台をトタンなどで覆う案が検討されたが、長さ二百七十メートル、高さ五十メートルの船台をトタンで覆う事は出来ても颱風で吹き飛ばされるのは防ぎようが無かった。いろんな方法が試されたが丈夫で軽い棕櫚のロープで簾を作って隠す方法が検討、試作され成功した。それで大がかりな棕櫚の皮集めになり、うちの隣の吉田の爺さんまで注文が来たのだ。どう云うルートで話が来たのかは今は知る由もない。「武蔵」の本では建造中の膨大な実話が連続し手に汗を握る。スパイ対策で海軍はグラバー邸まで買収したと云う。建造の秘密を守る為、長崎市内には数千名の海軍軍人、警察官が市民を監視するするために溢れる程だったと云う。巨大な武蔵は、まるで漁船が漁網でそっくり包まれたような姿で建造され包まれたまま進水する。

日本は大和、武蔵がほぼ完成するのを待って、米・英に戦いを挑んだ。この両艦さえ戦列に入れば絶対に負けないと思ったのだろう。しかし不思議なのは開戦の二日後、日本の空軍機はマレー半島沖でイギリスの新鋭戦艦プリンスオブウェールズとレパレスの二隻を爆撃と雷撃で撃沈している。片や飛行機が軍艦を沈めているのに、一方ではせっせと巨大艦を造るという状態であった。この矛盾は海軍の上層部にいたしがたい巨艦至上主義がはびこっていたからだろうか。完成した大和、武蔵は乗組員の猛訓練をしながら南太平洋上の決戦に臨んだ。だがたいした戦果もなく、武蔵は戦死した山本五十六長官の遺骨を東京に運んだりした。山本長官の国葬の日、在りし日の長官が佐伯に来て、長官旗を立てた自動車がサイドカーに先導されて料亭池彦の玄関に滑り込むのを見たのを思い出した。

その後、出撃した武蔵はパラオ諸島で艦首下を魚雷にやられた。その修理の為呉に帰り、修理後出港、しばらく佐伯湾に停泊していた。本にはその理由を書いていないが、私は飲料水の補給だと思う。佐伯湾に艦隊がわざわざ入港するのは飲料水を積み込むためだった。砲弾や重油は呉で、乗員の慰安なら別府湾の方がよかった。佐伯に寄港するのは赤道を越えて南に行っても腐らない水を積むためだった。その水は木立の水だった。木立（旧木立村）は、元越山が両腕を伸ばして抱いた様な盆地状の地形で、

佐伯の町に向かって北側に開いている。太平洋の湿った空気が、蒲江・米水津の山にぶつかって雨となり木立に降り注ぐ。昔から「木立の私雨」と云われ、年間雨量は飛び抜けて多い。大分県の一級河川で木立川は一番の急流となっている。元越山から木立川河口までの距離が一番短いのだ。山地に雨が降るとすぐ川に水が走るがすぐ干上がって水無川になる。水は伏流水となって礫の多い層をくぐって磨かれ、木立の角道・土井あたりで湧水となって溢れた。木立の入り口茶屋ケ鼻橋から角道まで一キロ程の木立川は、川幅が広く勾配も無く佐伯湾の海水がゆったりと出入りして、まるで水郷の様な風情がある。国木田独歩が元越山に登る時、木立・佐伯間の渡し船を楽しんだ所だ。川は水深がかなりあった。角道が隣村下堅田の小島地区に接する山の鼻を「マタケの鼻」と呼ぶ。そこに木立川と小さな堤防で接する三十坪程の池があった。この池に木立の伏流水がわき水となって溢れていて、池の底は湧き水でいつも砂が一面に踊っていた。水があまりにも清冽で冷たいので魚影も無い。

海軍が何時どうしてこの池の水に目をつけたのかわからないが、航空隊が出来る以前から艦隊が入港していたので、かなり早い時点だったと思う。軍艦に給水する長さ十メートル程の扁平な水船が、発動機船に何杯もつながって、池の土手にくっついてはポンプで水を汲みこんで運んだ。水を積むと船は水面すれすれに沈んだ。池の土手にはあまり見かけない大きな鋭いトゲのあるイバラがびっしり覆っていて、おいそれと池の中に入れなかった。植物性の天然フェンスである。大切な水源であるのに特別の施設も番人も居なかった。そのイバラで何か近寄るのがタブーの様な雰囲気が醸し出されていた。水船が昼も夜もやって来た時は、木立の人は「大艦隊が入っているな」と思った。そんな時には佐伯の町に水兵が溢れた。私は水船がしきりにやって来た昭和十六年の秋の終わり頃、艦隊を見るため木立と鶴見吹浦の界の灘山に駆け上った。大艦隊だった。戦艦二、空母四、巡洋艦二、駆逐艦多数、それが明くる日はもういない。半月位あとの十二月八日、ハワイを攻撃した事を知ったが、山本長官、乗組員、パイロット、みんな木立の水を飲みながら攻撃したのだと思った。

パラオで破損した艦首を修理した武蔵は、佐伯湾で木立の水を一杯積み込んで出港、フィリッピン周辺の開戦

に臨んだが、もう二度と日本に帰ることは無かった。
フイリッピン周辺海域は日本軍艦の墓場になった。武蔵、山城、扶桑の三戦艦、空母は太鷹、巡洋艦が多く熊野、八十島、能代、鬼怒、愛宕、鳥海、摩耶、阿武隈、最上、筑摩、鈴谷、那智、木曽。佐伯湾でなじみの深い美しい姿をした世界的に名鑑の巡洋艦群が沈み、駆逐艦は世界最速四十ノットの島風をはじめ三十三隻が沈んだ。「戦艦武蔵」の本で、武蔵最後の海戦の様子はつらく、幾度も本を閉じため息をついた。その断末魔の様子に胸が痛んだ。あれだけ骨を折って建造したのに、あまりにもあっけない最後だった。同じ人間がありったけの骨を折って造り、同じ人間がそれを撃ち沈める。これ程の愚行が此の世にあろうか。

本を読み終えてあらためてこれだけの資料を集め、これだけの名文の作品を書いた作家「吉村　昭氏」に驚嘆した。そして武蔵の乗組員二千三百九十九名のうち千三百七十六名の生存者が武蔵沈没の秘密を隠すため海軍当局から受けた仕打ちには腹の底から怒りを覚えた。

幾千、幾万の将兵の渇をいやした木立の水の池は堤防工事で埋め立てられ、今その姿は無い。ただ木立の老人のまぶたに残るだけである。木立の水は圃場整備で様子がすっかり変わった。今は、ずっと上流の佐伯支援学校と農協のいちご出荷場の近くに掘られた大きな井戸に湧き出て、それは絶えることなく一直線の水路で、一キロ下流の角道に流れ下り木立川に注ぐ。吉田の佐四郎爺さんは棕櫚が何に使われたか知らずに亡くなった。生きているうちに吉村さんの本が出て読んであげたら喜んだろうなと棕櫚を見ながら思った。